

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Large redacted text block]

パネルディスカッション

被害者がいつでもつながることができる支援

コーディネーター：大岡 由佳氏 武庫川女子大学 心理・社会福祉学部 教授
パネリスト：藤代 富弘氏 人間環境大学 総合心理学部 教授
高橋 久代氏 くまもと被害者支援センター犯罪被害相談員

第5次犯罪被害者等基本計画の策定に向け議論される中、今回テーマの「被害者がいつでもつながることができる支援」はどこまで進んでいるのでしょうか。コーディネーターを務める武庫川女子大教授の大岡由佳氏が提起し、パネルディスカッションは始まりました。

「まず、被害者の方が支援につながるまで、さまざまな壁が存在している」と人間環境大教授の藤代富弘氏が口火を切りました。支援経験で見てきた性暴力被害の実態を踏まえた架空事例を示しながら、親の口止めや、「誰も信じてもらえない」といった予期的なスティグマ（偏見）などが被害相談を阻害しているといいます。羞恥心や自責感、性意識の未熟さなどの心理的要因を挙げ、子どもたちには「気づきのスイッチ」を入れる教育や安心感の提供、人を信じる力を取り戻すなどの心理面からの支援が必要としました。

続いて、大岡氏が被害者の置かれている状況話を話しました。2023年度（令和5）の犯罪被害類型別等調査

から、警察への通報率が犯罪被害者等全体で36・9%にとどまっていることを示し、「相談につながっていない被害者が非常に多いという実態です」と指摘しました。さらに、80%弱が被害者への給付や支給、賠償のいずれも受けておらず、加害者から賠償があったのは3・1%に過ぎないことも報告しました。

一方で大岡氏は、政府の途切れない支援を取り上げました。都道府県を司令塔にワンストップ支援とコーディネーター配置を進めていると説明し、被害者が住む市町村レベルの支援体制をどう作っていくか、と問題提起しました。「埋もれて窓口につながらない被害者がいる」と厳しい現状認識も示し、実際に支援が進んでいくことを期待しました。

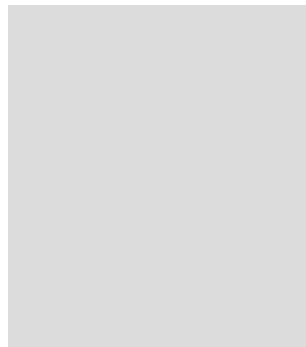
さらに、福祉現場で広がる「断らない相談」や「重層的支援」を紹介し、制度に人を合わせるのではなく「人を中心として関係機関が伴走型で支援していく」ことが求められるとしました。専門家としての知見から「PTG

(心的外傷後成長)」という概念を取り上げ、被害者が「人権が尊重されている」「安全安心が確保されている」「社会的つながりが持てる」という感覚を得られるよう働きかけることでPTGは上昇すると述べて、回復につながる支援の形態を示しました。

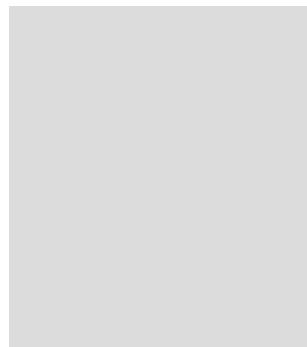
3人目の発言者、くまもと被害者支援センター相談

員の高橋久代氏は、全国被害者支援ネットワークの48支援センターへの調査の結果を報告しました。「被害から3年以上経過しての相談」が相当程度あり、支援が十分に届いていない実情を報告しました。しかも、その回答を詳しく見ると「相談のみで直接的支援は提供していない」が多かったのも気になるとしました。被害届を出していない人にも支援にあたっているが、課題もあり、「公的支援の要件に満たない」「希望された支援の提供が難しい」などの悩みが寄せられたといいます。ニーズに沿った支援を提供するために、地域の医療や福祉、教育現場などとの連携を発掘、強化する必要があると話しました。

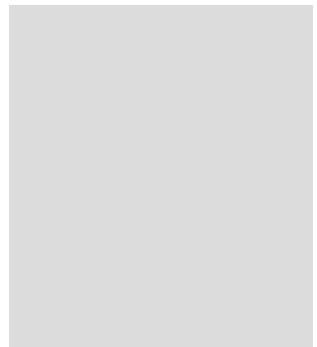
ディスカッションに移り、事前の寄せられた質問でも多かった「支援の提供体制と連携」が、まず取り上げられました。警察の被害者支援室に勤務経験のある藤代氏は、検察庁など連携する機関と支援での失敗や教訓を共有し、被害者のニーズを組織的に積み上げていくことで次の支援に生かそうとする事例を紹介。高橋氏は被害届を出していない人を支援につなぐためにもワンストップの相談機関が必要としました。また、「支援へのアクセスと課題」の議論では、藤代氏と高橋氏がそ



大岡由佳氏



藤代富広氏



高橋久代氏

って子どもの性被害を取り上げ、被害に気づくための出前講座や講演を重ね、大人たちや友だちの声かけを促していくことが大切と訴えました。大岡氏は、身近な市町村や地域、学校からSNSを使った情報発信が必要としました。

「被害者への理解と支援のあり方」についての議論では、「援助交際と性被害は別物として支援」するのかという問題が提示されました。援助交際で小遣い稼ぎをする少女を、どう理解するのか。藤代氏は「別物でなくてよい」と。少女たちの多くは、自身で意識していなくても、実際には大人に強いられ、あるいは家庭の事情で援助交際しており、心理面だけでなく生活面への直接的支援が必要と強調しました。

最後に「支援者にできることは何か」「支援者が知っておくべきことは何か」の問いに各人が考えを述べました。藤代氏は「被害者がなぜ支援につながらなかったのか、心理的な症状や葛藤もぜひ理解を」、高橋氏は「難しい支援に迷った時こそ、学びが大事」、大岡氏は「熱い心と冷たい手」が必要とし、冷たい手とは「地道な事例検討を詰め重ねていくこと」と語った上で、「やはり当事者を中心に」した視点を持つことが大切と締めくくりました。

【パネルディスカッション アンケート】

- 「知識はやさしさ」という言葉が心に残りました。“人”を中心として関係機関が伴走型で支援を行うことができるよう日々アップデートしていかなければならないと思いました。
- ようやく、被害者支援にも福祉が入るようになったと感じています。今後は医療や心理、福祉の専門家が枠を超えて連携していく必要があると感じています。
- 大岡先生のテキストマイニングからの掘り下げ方がとても良かったです。知識は優しさという言葉はもっともですが、中途半端な知識は大きく人を傷つけることにつながると思うので、これからもさらに知識をつけながら、わからないことはわかる人に確実に繋ぐ事をしていきたいです。
- いつでもという心構えには日頃から準備と予測と瞬発力が必要であると感じます。TICは概念でありそれをどう活かしていくかは支援者にかかっているのだという励みとして奮い立つ思いです。
- 声に出せない被害者がいること、そして被害者の反対に加害者がいること。加害者を生まない社会を作り、被害者が相談しやすい社会づくりの必要性を感じました。とても事例がわかりやすい内容でした。よい学びになりました。ありがとうございました。